



内科当直医のための ER の Tips ジェネラルケースのディープアプローチと エビデンス 安藤裕貴 著

●A5 頁504 2017年10月
定価：本体5,400円+税
[ISBN978-4-89590-608-1]三輪書店刊

この本では救急室で遭遇する「高齢者の疾患」にフォーカスがあてられている。高齢者は病歴が取りにくく、併存症として多くの疾患を抱えていることが多い。たくさんの薬を飲んでいるので、薬剤の副作用や相互作用も心配だ。高齢ゆえに免疫不全患者でもある。訴えがはっきりしない高齢患者の診療は非常に難しく、時間や労力がかかるので誰もが敬遠しがちである。

高齢者に対する救急診療をこれほど詳しく明確に解説した本は、わが国になかったのではないだろうか。コミュニケーション法が具体的に書かれていることも特筆に値する。高齢者は視野が狭いため「患者の正面で唇の動きが見えるように、少しおおげさに話をすることや「アイコンタクトを入れ」注意を医療者に向けさせることがとても大切である。

本書の前半では「ERの高齢者診療」の基本が解説される。救急室では見逃してはいけない疾患とよくある疾患の2軸で鑑別診断を展開する。「徐脈+低血圧」というバイタルサインに基づく keyword からは迷走神経反射、低体温、右室梗塞、高カリウム血症、甲状腺機能低下症などの鑑別診断が展開される。これらの疾患が想起できると、問診で確かめるべき情報やチェックすべき身体診察がわかる。どの検査をすぐに提出する必要があるのかわかるのである。

「高齢者の酸素分圧99%（室内気）は過呼吸を示している所以要注意」と寺澤秀一先生（福井大学名誉教授）の講義で聞いたことがあった。臨床の達人から普通の人では気がつかない診療のコツを教えてもらおうと、急に視界が開けてくることがある。この本にはこのような臨床の智慧がたくさん隠されている。

「一万時間の法則」というものがある。どのような技能も上達するには一万時間の練習が必要であるらしい。毎日8～10時間の練習を続けても、プロ級の技の習得

に3年はかかる。医師にあてはめれば、初期研修医とその後の1年間がその期間にあたるだろう。しかし、漫然と一万時間を過ごしたのでは体得できない。考えながら診療することが大切なのである。臨床の智慧は修行者を正しい方向に導いてくれる。

本書後半では「ジェネラルケース」と呼ばれる、担当科が決まりにくい、または当番制で診る疾患の診療が語られている。誤嚥性肺炎、尿路感染症、インフルエンザがこのカテゴリーに入る。誤嚥性肺炎を例に取れば、問診による情報収集のコツ、リスク分析、身体所見、画像検査、血液検査、エコー検査、喀痰グラム染色、抗菌薬の選択が詳細に解説されている。とても実践的だ。最新のエビデンスを勉強しながら、「また誤嚥性肺炎か」と安易に片づけてしまいそうな common disease の診断と治療が体系的に学べる。そればかりではない。肺炎予測ルール、High Flow Therapy（ネーザルハイフローTM）へと解説は進み、修得できる知識はかなりディープなのだ。

著者が制作したスマートフォン用アプリ「ERのTips」が無償提供されているのも嬉しい。虫垂炎における身体所見の尤度比、腰痛レッドフラッグサイン、肺炎治療における標準的な抗菌薬選択など、日常診療でちょっと確認したい知識がたくさん載っていて重宝する。筆者も外来診療でよく利用している。また本書で使われているスライドのPDFが入手できる。字の大きさや字体、配色、背景の使い方など、効果的なプレゼンを学びたい医師には貴重な資料となるであろう。

本書を何度も読み返せば、高齢者診療を基礎から学びたい研修医、救急診療におけるパールを修得したい専攻医、若手医師の指導に携わる指導医にとって、最強の指南書となるに違いない。